

## 小学校学習指導要領「生活」の特色

戸 田 浩 暢\*

(2017年11月9日 受理)

### Characteristics of the Living Environment Studies in the Course of Study for Elementary Schools

Hironobu TODA\*

This paper analyzes the report published by the Central Council for Education on 21<sup>st</sup> December, Heisei 28 (2016), from three points of view: first, reconstructing the framework presented as improvements and directions for the Courses of Study; second, organizing the framework of the curriculum based on the three pillars of quality and ability; and third, realizing “subjective, interactive and deep learning.” This article also analyzes the revisions of the section of Living Environment Studies in the Course of Study for Elementary Schools that were based on this report from three points of view: first, characteristics of largely modified goals; second, “subjective, interactive and deep learning” specific to Living Environment Studies; and third, the issues related to teaching performance for Living Environment Studies. Finally, this article presents a well-improved teaching plan for ideal classes, by focusing on “subjective, interactive and deep learning” specific to Living Environment Studies.

**Keywords:** Living Environment Studies 生活科, Courses of Study 学習指導要領, elementary schools 小学校

#### 1. はじめに

平成26年11月に、文部科学大臣から新しい時代にふさわしい学習指導要領等の在り方について中央教育審議会に諮問を行った。これに対し、中央教育審議会は、平成28年12月21日に「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（以下「答申」と記す）を示した。これを踏まえ、平成29年3月31日に学校教育法施行規則を改正するとともに、小学校学習指導要領を公示した。また、平成29年6月に「小学校学習指導要領解説」が出された。小学校学習指導要領は、平成32年4月1日から全面実施することとしている。

生活科の学習指導要領に係る今次改訂の特色は何だろうか。

生活科に関する学習指導要領は、今まで3回示されてきた。前回の改訂である2008（平成20）年では、目標は、「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、

社会及び自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。」と示されており、これは、1989（平成元）年に示された目標に、身近な「人々」という文言が加えられただけである。

今次改訂においては、生活科の目標に大きな変化がみられ、内容は大幅な見直しがなされている。これは、「答申」に示された、「これからの教育課程やその基準となる学習指導要領等には、学校教育を通じて育む『生きる力』とは何かを資質・能力として明確にし、教科等を学ぶ意義を大切にしつつ教科等横断的な視点で育んでいくこと、社会とのつながりや各学校の特色づくり、子供たち一人一人の豊かな学びの実現に向けた教育改善の軸としての役割が期待されている。」<sup>1)</sup>に基づき、学習指導要領等の枠組みが大きく見直されたためである。

本稿では、まず、「答申」に関して、次の3点を概観し、整理したい。1点目は、学習指導要領等の改善の方向性として出された、枠組みを再構築することについて

\* 広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科准教授

て、2点目は、資質・能力の三つの柱に基づく、教育課程の枠組みの整理について、3点目は、「主体的・対話的で深い学び」の内容についてである。また、「答申」に基づいて改訂された「小学校学習指導要領生活」に関して、次の3点を概観し、整理したい。1点目は、大幅に変更された目標の特色について、2点目は、生活科固有の「主体的・対話的で深い学び」について、3点目は、生活科の授業実践に係る課題についてである。最後に、今後望まれる授業に関して、生活科固有の「主体的・対話的で深い学び」に着目し、より改善された指導計画を提示したい。

## 2. 学習指導要領等の改善

### (1) 学習指導要領等の枠組みの見直し

「答申」では、学習指導要領等の改善の方向性として、「これからの教育課程や学習指導要領等は、学校の創意工夫の下、子供たちの多様で質の高い学びを引き出すため、学校教育を通じて子供たちが身に付けるべき資質・能力や学ぶべき内容などの全体像を分かりやすく見渡せる『学びの地図』として、教科等や学校段階を越えて教育関係者間が共有したり、子供自身が学びの意義を自覚する手掛かりを見いだしたり、家庭や地域、社会の関係者が幅広く活用したりできるものとなることが求められている。教育課程が、学校と社会や世界との接点となり、さらには、子供たちの成長を通じて現在と未来をつなぐ役割を果たしていくことが期待されているのである。」<sup>2)</sup>と示されている。これは、従前から求められていた子供たちの多様で質の高い学びを充実させることを目的に、各学校がより一層、創意工夫することが望まれている。また、「学びの地図」というキーワードによって、学習指導要領等は子供たちが身に付けるべき資質・能力や学ぶべき内容などの全体像を示す必要性があることが求められている。そして、学校内のみに閉じることなく、社会に開かれたものとなることが示された。

これに対応し、①「何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)、②「何を学ぶか」(教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成)、③「どのように学ぶか」(各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実)、④「子供一人一人の発達をどのように支援するか」(子供の発達を踏まえた指導)、⑤「何が身に付いたか」(学習評価の充実)、⑥「実施するために何が必要か」(学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策)の6点<sup>3)</sup>により枠組みを改善するとともに、各学校において学校教育の改善・充実に資する「カリキュラム・マネジメント」の実現が求

められた。

また、「答申」において、資質・能力の三つの柱に基づく教育課程の枠組みの整理を行っており、「全ての資質・能力に共通し、それらを高めていくために重要となる要素は、教科等や直面する課題の分野を越えて、学習指導要領等の改訂に基づく新しい教育課程に共通する重要な骨組みとして機能するものである。こうした骨組みに基づき、教科等と教育課程全体のつながりや、教育課程と資質・能力の関係を明らかにし、子供たちが未来を切り拓ひらいていくために必要な資質・能力を確実に身に付けられるようにすることが重要である。海外の事例や、カリキュラムに関する先行研究等に関する分析によれば、資質・能力に共通する要素は、知識に関するもの、スキルに関するもの、情意(人間性など)に関するものの三つに大きく分類されている。前述の三要素は、学校教育法第30条第2項が定める学校教育において重視すべき三要素(「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」)とも大きく共通している。」<sup>4)</sup>と示された。第1の柱は、「何を理解しているか、何ができるか(生きて働く「知識・技能」の習得)」、第2の柱は、「理解していること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)」、第3の柱は、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養)」である。

### (2) 「主体的・対話的で深い学び」

「答申」では、「主体的・対話的で深い学び」の具体的な内容について、「『主体的・対話的で深い学び』の実現とは、以下の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的(アクティブ)に学び続けるようにすることである。①学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる『主体的な学び』が実現できているか。(中略)②子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める『対話的な学び』が実現できているか。(中略)③習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう『深い学び』が実現できているか。」<sup>5)</sup>と整理している。

①に関しては、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」を実現するために、学ぶことに興味や関心を持つという情意面をあげ、また、自己のキャリア形成との関連性を考えさせ、そして見通しを持って粘り強く取り組むという意欲をあげてある。「答申」では「子供自身が興味を持って積極的に取り組むとともに、学習活動を自ら振り返り意味付けたり、身に付いた資質・能力を自覚したり、共有したりすることが重要である。」<sup>6)</sup>とも示してある。②に関しては、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」を実現するため、グループワークやペア活動を取り入れるなどの子供同士の協働性についてや、子供以外の他者との対話にとどまらず、先哲の考え方を参考に自己内対話を促すことをあげている。「答申」では、「身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには、多様な表現を通じて、教職員と子供や、子供同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくことが求められる。」<sup>7)</sup>とも示してある。③に関しては、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」を実現するために、習得・活用・探究という従前から求められている学びの過程を充実させ、授業で獲得した「見方・考え方」を働かせ、知識を関連づけたり、情報を分析し結論を導いたり、問題を発見し解決するということをあげている。「答申」では、「子供たちが、各教科等の学びの過程の中で、身に付けた資質・能力の三つの柱を活用・発揮しながら物事を捉え思考することを通じて、資質・能力がさらに伸ばされたり、新たな資質・能力が育まれたりしていくことが重要である。教員はこの中で、教える場面と、子供たちに思考・判断・表現させる場面を効果的に設計し関連させながら指導していくことが求められる。」<sup>8)</sup>とも示してある。

### 3. 生活科の目標の特色

現行の学習指導要領に関しては、次の4点<sup>9)</sup>について、更なる充実を図ることが課題としてあげられている。

第1点目は、「活動や体験を行うことで低学年らしい思考や認識を確かに育成し、次の活動へつなげる学習活動を重視すること。『活動あって学びなし』との批判があるように、具体的な活動を通して、どのような思考力等が発揮されるか十分に検討する必要がある。」という課題である。

第2点目は、「幼児教育において育成された資質・能力を存分に発揮し、各教科等で期待される資質・能力を育成する低学年教育として滑らかに連続、発展させること。幼児期に育成する資質・能力と小学校低学年で育成

する資質・能力とのつながりを明確にし、そこでの生活科の役割を考える必要がある。」という課題である。

第3点目は、「幼児教育との連携や接続を意識したスタートカリキュラムについて、生活科固有の課題としてではなく、教育課程全体を視野に入れた取組とすること。スタートカリキュラムの具体的な姿を明らかにするとともに、国語、音楽、図画工作などの他教科等との関連についてもカリキュラム・マネジメントの視点から検討し、学校全体で取り組むスタートカリキュラムとする必要がある。」という課題である。

第4点目は、「社会科や理科、総合的な学習の時間をはじめとする中学年の各教科等への接続が明確ではないこと。単に中学年の学習内容の前倒しにならないよう留意しつつ、育成を目指す資質・能力や『見方・考え方』のつながりを検討することが必要である。」という課題である。

これらの課題を解決することが求められる、今次改訂された生活科の目標は次のように示されている。

具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。
- (2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようになる。
- (3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

『学習指導要領解説生活編』では、教科目標は大きく分けて二つの要素で構成されているとし、「一つは、生活科の前提となる特質、生活科固有の見方・考え方、生活科における究極的な児童の姿である。もう一つは、(1)、(2)、(3)として示している、生活科を通して育成することを目指す資質・能力である。」<sup>10)</sup>と、示されている。

今次改訂された生活科の目標の特色は、「答申」において、資質・能力の三つの柱に基づく教育課程の枠組みの整理に対応している。

最初の柱に関しては、「活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。」としている。今次の改訂に



においては、「答申」に対応して「自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付く」とし、単に自分と自分を取り巻く環境とのかかわりにとどまらず、「自分自身」・「身近な人々」・「社会」・「自然」の「特徴やよさ」に気付くことが求められ、また、「それらの関わり等」にも気付くことが求められている。「何を理解しているか」ということをより明確にすることとなり、生活科で求められている「気付き」に関して深まりがみられる。

二番目の柱に関しては、「身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。」としている。今次の改訂においては、「答申」に対応して「身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え」と、思考力の育成に関して視点が明示されている。また、新たに、「表現することができるようにする」という文言が加わり、表現力の育成に関しても明確に示されている。

三番目の柱に関しては、「身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。」としている。「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」を具体化して、明示してある。

大幅な見直しは各学年の目標に関してもなされている。従前は4つの項目を示されていたが、今次では「答申」の三つの柱に基づき、3つの項目に示してある。

目標の第1は、「学校、家庭及び地域の生活に関わることを通して、自分と身近な人々、社会及び自然との関わりについて考えることができ、それらのよさやすばらしさ、自分との関わりに気付き、地域に愛着をもち自然を大切にしたり、集団や社会の一員として安全で適切な行動をしたりするようにする。」とされている。三つの柱に対応して、「自分と身近な人々、社会及び自然との関わりについて考えること」ができるようになることが求められるとともに、「それらのよさやすばらしさ、自分との関わりに気付く」ことが求められている。また、「地域に愛着をもち自然を大切に」することや、「集団や社会の一員として安全で適切な行動」することに関しては従前の表現を多少変更しながらも残されている。

目標の第2は、「身近な人々、社会及び自然と触れ合ったり関わったりすることを通して、それらを工夫したり楽しんだりすることができ、活動のよさや大切さに気付き、自分たちの遊びや生活をよりよくするようにする。」とされ、三つの柱に対応して、「楽しんだりすることができ、活動のよさや大切さに気付く」ことが求められると

ともに、「自分たちの遊びや生活をよりよくするようにする」ことが求められている。

目標の第3は、「自分自身を見つめることを通して、自分の生活や成長、身近な人々の支えについて考えることができ、自分のよさや可能性に気付き、意欲と自信をもって生活するようにする。」とされ、三つの柱に対応して、「自分自身を見つめることを通して、自分の生活や成長、身近な人々の支えについて考えること」ができるようになることが求められている。

#### 4. 生活科における「主体的・対話的で深い学び」

「答申」では、生活科における「主体的・対話的で深い学び」に関して、「アクティブ・ラーニングの視点による生活科の授業改善は、これまでと同様に、児童の思いや願いを実現する体験活動を充実させるとともに、表現活動を工夫し、体験活動と表現活動とが豊かに行きつ戻りつする相互作用を意識することが重要である。」<sup>11)</sup>としている。

そして、「主体的な学びの視点」として、「・生活科では、子供の生活圏である学校、家庭、地域を学習の対象や場とし、対象と直接関わる活動を行うことで、興味や関心を喚起し、自発的な取組を促してきた。こうした点に加えて、表現を行い伝え合う活動の充実を図ることが必要である。・小学校低学年は、自らの学びを直接的に振り返ることは難しく、相手意識や目的意識に支えられた表現活動を行う中で、自らの学習活動を振り返る。振り返ることで自分自身の成長や変容について考え、自分自身についてのイメージを深め、自分のよさや可能性に気付いていく。自分自身への気付きや、自分自身の成長に気付くことが、自分は更に成長していけるという期待や意欲を高めることにつながる。・学習活動の成果や過程を表現し、振り返ることで得られた手応えや自信は、自らの学びを新たな活動に生かし挑戦していこうとする子供の姿を生み出す。こうしたサイクルが『学びに向かう力』を育成するものとして期待することができる。」<sup>12)</sup>の3点をあげている。

「対話的な学び」の視点としては、「・生活科では、身の回りの様々な人々と関わりながら活動に取り組むことや、伝え合ったり交流したりすることが大切である。伝え合い交流する中で、一人一人の発見が共有され、そのことをきっかけとして新たな気付きが生まれたり、関係が明らかになったりすることが考えられる。他者との協働や伝え合い交流する活動は、一人一人の子供の学びを質的に高めることにもつながる。・また、双方向性のある活動が行われ、対象と直接関わり、対象とのやり取りを

する中で、感じ、考え、気付くなどして『対話的な学び』が豊かに展開されることが求められる。」<sup>13)</sup>の2点をあげている。

「深い学び」の視点としては、「生活科では、思いや願いを実現していく過程で、一人一人の子供が自分との関わりで対象を捉えていくことが生活科の特質であると言える。・『身近な生活に関わる見方・考え方』を生かした学習活動が充実することで、気付いたことを基に考え、新たな気付きを生み出し、関係的な気付きを獲得するなどの『深い学び』を実現することが求められる。低学年らしいみずみずしい感性により感じ取られたことを、自分自身の実感の伴った言葉にして表したり、様々な事象と関連付けて捉えようとしたりすることを助けるような教員の関わりが求められる。」<sup>14)</sup>の2点をあげている。

## 5. 改訂された生活科に係る具体的な授業計画

今次改訂された生活科に関して目標の特色や生活科固有の「主体的・対話的で深い学び」についてみてきたが、今後望まれる授業に関して考察をしていきたい。

ここでは、生活科の改訂を主導した文部科学省初等中等教育局視学官の田村学氏が編著者となった、『生活・総合 アクティブ・ラーニング』の中で提示してある授業を取り上げて、より望ましい授業構成について考えて行きたい。

取り上げるのは、「げんきな はなを そだてよう」の授業<sup>15)</sup>と、「あきの あそび めいじん」の授業<sup>16)</sup>である。

### (1) 「げんきな はなを そだてよう」の指導計画

最初に取り上げる授業の指導計画は表1（稿者一部改変）である。

表1 「げんきな はなを そだてよう」の指導計画

|  |                             |
|--|-----------------------------|
| 単元名：「げんきな はなを そだてよう」   |                             |
| 【本単元の目標】<br>植物を育てることに興味をもち、育てている植物の世話をしたり、観察をしたりして、その変化や成長の様子、上手に世話をできるようになった自分自身の成長に気付き、植物を大事に育てることができるようになる。 |                             |
| 1 はなの たねを まこう  |                             |
| 第1時  | これまでの生活経験を基に育てたい花について話し合う。  |
| 第2時  | 自分が育てたい花を決める。               |
| 第3時  | 種まきをする。                     |
| 第4時  | 種まきの様子や、種の形などを「お花ノート」に記録する。 |

|                  |   |
|------------------|---|
| 第5時              | 育てたい花の育て方を調べる。  |
| 2 はなの せわを しよう    |   |
| 第6～15時           | ①植物の育ち具合に応じて、花の支柱を立てたり、水をあげたりするなど花の世話をする。<br>②継続的に葉の様子や茎の様子など、花の様子を観察する。<br>③花の成長の様子で気付いたことを「お花ノート」に絵や文で表す。<br>*①～③を行き戻りしながら、活動を行う。 |
| 3 はなの せわを ふりかえろう |   |
| 第16時             | これまでの世話を振り返り、クラス全体で話し合う。  |
| 第17時             | これまでの栽培活動を「うえきばちミュージアム」にどのように表現していくかを考える。   |
| 第18～20時          | 「うえきばちミュージアム」に自分の世話の様子や、成長の様子、育てているときの気持ちを多様な表現方法で表す。   |

本授業は単元を3部構成にして20時間掛けて行われている。

第1部の第1時から第5時では、「これまでの生活における栽培経験を話し合い、一人一人が自分の思いや願いに沿った花を育てることができるようにする。また、春から育てることのできる花について調べる機会を設定し、世話の仕方についても調べることができるようにする。」<sup>17)</sup>ということを企図している。これに対応して、第1時ではこれまでの生活経験を基に育てたい花について話し合う活動を設定し、第2時では自分が育てたい花を決める活動を設定し、第3時では種まきをする活動を設定し、第4時では種まきの様子や種の形などを「お花ノート」に記録する活動を設定し、第5時では育てたい花の育て方を調べる活動を設定してある。

第2部の第6時から第15時では、「自分たちの花に必要なものを考えたり、それを準備したりして、花を育てることのよさに気付き、自分たちの花を大切に育てることができるようにする。また、花の成長の様子で気付いたことを適宜絵や文などで表現することができるようにし、それを蓄積できるようにする。」<sup>18)</sup>ということを企図している。これに対応して、①植物の育ち具合に応じて、花の支柱を立てたり、水をあげたりするなど花の世話をする、②継続的に葉の様子や茎の様子など、花の様子を観察する、③花の成長の様子で気付いたことを「お花ノート」に絵や文で表すといった活動を設定してある。

第3部の第16時から第20時では、「これまでの栽培活動を振り返る活動を通して、自分の花への親しみが増え、上津に世話をできるようになった自分自身に気付き、こ

れからの生活に意欲や自信をもつことができるようにする。多様な表現方法を用いて、栽培活動を振り返ることができる機会を設定するようにする。」<sup>19)</sup> ということを企図している。これに対応して、第16時ではこれまでの世話を振り返りクラス全体で話し合う活動を設定し、第17時ではこれまでの栽培活動を「うえきばちミュージアム」にどのように表現していくかを考える活動を設定し、第18時から第20時では「うえきばちミュージアム」に自分の世話の様子や、成長の様子、育てているときの気持ちを多様な表現方法で表す活動を設定してある。

一方、より望ましい授業構成について、生活科固有の「主体的・対話的で深い学び」に着目した場合、次の表2に示す改善した指導計画が考えられる。

表2 改善した「げんきな はなを そだてよう」の指導計画

|   |  |
|---|--|
| 単元名：「げんきな はなを そだてよう」  |  |
| <b>【本単元の目標】</b><br>植物を育てることに関心をもち、育てている植物の世話をしたり、観察をしたりして、その変化や成長の様子、上手に世話をできるようになった自分自身の成長に気付く、植物を大事に育てることができるようにする。また、友達と協働することにより、新たな気付きを共有することができる、より深い学びができるようにする。 |  |
| 1 はなの たねを まこう   |  |
| 第1時   | これまでの生活経験を基に、育てたい花について、友達同士で話し合う。【対】   |
| 第2時   | 自分が育てたい花を決める。育てたい花が同じグループで集まり、なぜその花を育てたいのかを発表し合い、自己と異なる意見に触れる。【主】・【対】  |
| 第3時   | 育てたい花の育て方を、育てたい花が同じグループで集まり調べる。【対】   |
| 第4時   | 育てたい花が同じグループで集まり、協力しながら種まきをする。【主】・【対】  |
| 第5時   | 種まきの様子や、種の形などを「お花ノート」に記録し、育てたい花が同じグループで集まり、発表し合う。【主】・【対】   |
| 2 はなの せわを しよう   |  |
| 第6～15時  | ①植物の育ち具合に応じて、花の支柱を立てたり、水をあげたりするなど、同じ花を育てているグループで協力しながら花の世話をする。<br>②継続的に葉の様子や茎の様子など、花の様子を観察する。観察したことを同じ花を育てているグループで共有する。<br>③花の成長の様子で気付いたことを「お花ノート」に絵や文で表す。表現したことを同じ花を育てているグループで共有する。<br><b>【主】・【対】</b><br>*①～③を行き戻りしながら、活動を行う。 |

|                  |  |
|------------------|--|
| 3 はなの せわを ふりかえろう |  |
| 第16時             | これまでの世話を振り返り、同じ花を育てているグループで共有した後、クラス全体で話し合う。【対】  |
| 第17時             | これまでの栽培活動を「うえきばちミュージアム」にどのように表現していくかを個人で考えた後、同じ花を育てているグループで考える。【主】・【対】   |
| 第18～20時          | 「うえきばちミュージアム」に自分の世話の様子や、成長の様子、育てているときの気持ちを同じ花を育てているグループで共有した後、多様な表現方法で表す。他のグループとの共通点や違いに気付く、表現の良さをみつける。【主】・【対】・【深】 |

\*「主体的な学び」：【主】 「対話的な学び」：【対】  
「深い学び」：【深】

第1部の第1時では、これまでの生活経験を基に、育てたい花について、友達同士で話し合う活動を設定し、対話的な学びを意識して指導する。第2時では、自分が育てたい花を決める。育てたい花が同じグループで集まり、なぜその花を育てたいのかを発表し合い、自己と異なる意見に触れる活動を設定し、主体的・対話的な学びを意識して指導する。第3時では、種まきをする前に育てたい花の育て方を、育てたい花が同じグループで集まり調べる活動を設定し、対話的な学びを意識して指導する。第4時では、育てたい花が同じグループで集まり、協力しながら種まきをする活動を設定し、対話的な学びを意識して指導する。第5時では、種まきの様子や、種の形などを「お花ノート」に記録し、育てたい花が同じグループで集まり、発表し合う活動を設定し、主体的・対話的な学びを意識して指導する。

第2部の第6時から第15時では、①植物の育ち具合に応じて、花の支柱を立てたり、水をあげたりするなど、同じ花を育てているグループで協力しながら花の世話をする活動を設定し、主体的・対話的な学びを意識して指導する。②継続的に葉の様子や茎の様子など、花の様子を観察する。観察したことを同じ花を育てているグループで共有する活動を設定し、主体的・対話的な学びを意識して指導する。③花の成長の様子で気付いたことを「お花ノート」に絵や文で表す。表現したことを同じ花を育てているグループで共有する活動を設定し、主体的・対話的な学びを意識して指導する。

第3部の第16時では、これまでの世話を振り返り、同じ花を育てているグループで共有した後、クラス全体で話し合う活動を設定し、対話的な学びを意識して指導する。第17時では、これまでの栽培活動を「うえきばち



ミュージアム」にどのように表現していくかを個人で考えた後、同じ花を育てているグループで考える活動を設定し、主体的・対話的な学びを意識して指導する。第18時から第20時では、「うえきばちミュージアム」に自分の世話の様子や、成長の様子、育てているときの気持ちを同じ花を育てているグループで共有した後、多様な表現方法で表す。他のグループとの共通点や違いに気づき、表現の良さをみつける活動を設定し、主体的・対話的で深い学びを意識して指導する。

この改善した授業を、改訂された目標と見比べた場合、「(1) 花を栽培する活動や体験の過程において、自分自身、身近な友達、花が生育することの特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、花を中心にしながら植物を育てるために必要な習慣や技能を身に付けるようにする」、「(2) 身近な友達、花を育成することを自分との関わりで捉え、自分自身や花を適切に栽培することについて考え、多様な方法で表現することができるようにする。」、「(3) 身近な友達に自ら働きかけ、花を積極的に栽培するなどし、意欲や自信をもって学んだり学校生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。」と表現することができる。

#### (2)「あきの あそび めいじん」の指導計画

次に取り上げる「あきの あそび めいじん」の指導計画は表3（稿者一部改変）である。

表3 「あきの あそび めいじん」の指導計画

|   |                                     |
|---|-------------------------------------|
| 単元名：「あきの あそび めいじん」  |                                     |
| 【本単元の目標】<br>身近な自然に関心をもち、四季の変化、季節によって生活が変わることや自然物などの特徴を生かして、自然の面白さ、不思議さに気付くとともに様々な遊びを工夫しながら楽しく遊ぶことができるようにする。 |                                     |
| 1 校庭や公園へ秋を探しに行こう  |                                     |
| 第1～3時   | 校庭で秋を探しながら、自然と触れ合う。                 |
| 第4時   | 秋になって自然の様子など変わってきている点について話し合う。      |
| 第5～9時   | 公園に出かけ、秋を探しながら、自然と触れ合い、秋の自然物を使って遊ぶ。 |
| 第10時  | 公園や校庭で、見つけたものや遊びを紹介する。              |
| 2 見つけた秋で遊ぶ計画を立てよう   |                                     |
| 第11～12時   | 見つけた秋の自然物を使って、つくりながら遊ぶ。             |
| 第13時  | 自分の遊ぶものをつくり、さらに必要な秋のものを考える。         |

|              |  |
|--------------|--|
| 第14～18時      | 公園に出かけ、自然と触れ合い、遊びに必要な秋のものを集めたり、遊んだりする。   |
| 3 秋の遊び名人になろう |  |
| 第19～21時      | 遊ぶものをつくる。                                |
| 第22～23時      | つくったものを紹介し合い、楽しく遊ぶ。<br>(秋の遊び名人パートⅠ)      |
| 第24時         | 秋の遊びを振り返り、他のクラスとの交流会について話し合う。            |
| 第25～26時      | 他のクラスの友達に、つくったものを紹介し合い楽しく遊ぶ。(秋の遊び名人パートⅡ) |
| 第27時         | 季節の変化や、落ち葉や木の実で遊んだことをカードや絵や文で表して学習をまとめる。 |

本授業は単元を3部構成にして27時間掛けて行われている。

第1部の第1時から第10時では、「繰り返し校庭や公園で、秋探しをすることによって、自然や季節の変化に関心をもつことができるようにする。また、自然と触れ合い、あきの自然物を使って遊び、そのときの様子や思いを紹介させ、子どもの気づきを価値付けるようにする」<sup>20)</sup>ということを企図している。これに対応して、第1時から第3時では校庭で秋を探しながら、自然と触れ合う活動を設定し、第4時では秋になって自然の様子など変わってきている点について話し合う活動を設定し、第5時から第9時では公園に出かけ、秋を探しながら、自然と触れ合い、秋の自然物を使って遊ぶ活動を設定し、第10時では公園や校庭で、見つけたものや遊びを紹介する活動を設定してある。

第2部の第11時から18時では、「身近な自然物の中から遊びを考え、使ってみたい物を見付け、遊びをつくり出すことができるようにする。繰り返し秋の自然に触れる時間・環境・空間を設定し、見付けながら遊び、遊びながらつくる環境を意図的に設定し、子どもの思いや願いを大切に学習意欲を高める。」<sup>21)</sup>ということを企図している。これに対応して、第11～12時では見つけた秋の自然物を使って、つくりながら遊ぶ活動を設定し、第13時では自分の遊ぶものをつくり、さらに必要な秋のものを考える活動を設定し、第14～18時では公園に出かけ、自然と触れ合い、遊びに必要な秋のものを集めたり、遊んだりする活動を設定してある。

第3部の第19時から第27時では、「見つけた秋の自然物を使って、みんなで楽しく遊ぶよさや季節と自分たちの生活とのかかわりに気付くことができるようにする。そのためにいろいろな秋の経験を振り返り、たくさんの秋

の共通点や相違点を見付け、ボトムアップで、秋についてのそれぞれの概念を構築していく。」<sup>22)</sup> ということを企図している。これに対応して、第19～21時では遊ぶものをつくる活動を設定し、第22～23時ではつくったものを紹介し合い、楽しく遊ぶ（秋の遊び名人パートⅠ）活動を設定し、第24時では秋の遊びを振り返り、他のクラスとの交流会について話し合う活動を設定し、第25～26時では他のクラスの友達に、つくったものを紹介し合い楽しく遊ぶ（秋の遊び名人パートⅡ）活動を設定し、第27時では季節の変化や、落ち葉や木の実で遊んだことをカードや絵や文で表して学習をまとめる活動を設定してある。

一方、より望ましい授業構成について、生活科固有の「主体的・対話的で深い学び」に着目した場合、次の表4に示す改善した指導計画が考えられる。

表4 改善した「あきの あそび めいじん」の指導計画

|  |  |
|--|--|
| 単元名：「あきの あそび めいじん」   |  |
| 【本単元の目標】<br>身近な自然に関心をもち、四季の変化、季節によって生活が変わることや自然物などの特徴を生かして、自然の面白さ、不思議さに気付くとともに様々な遊びを工夫しながら楽しく遊ぶことができるようにする。自己が考えた遊びを友達と発表し合い、新たな気付きを共有することができ、より深い学びができるようにする。 |  |
| 1 校庭や公園へ秋を探しに行こう   |  |
| 第1～3時  | 校庭で秋を探しながら、自然と触れ合う。友達と話し合いをしながら秋を探す。【主】・【対】                                |
| 第4時  | 秋になって自然の様子など変わってきている点について話し合う。友達と意見交流することで新たな気付きを共有する。【対】                  |
| 第5～9時  | 公園に出かけ、秋を探しながら、自然と触れ合い、秋の自然物を使って遊ぶ。友達と話し合いをしながら秋を探し、秋の自然物を使って友達と遊ぶ。【主】・【対】 |
| 第10時   | 公園や校庭で、見付けたものや遊びを紹介する。友達と意見交流することで新たな気付きを共有する。【主】・【対】                      |
| 2 見付けた秋で遊ぶ計画を立てよう  |  |
| 第11～12時  | 見付けた秋の自然物を使って、つくりながら遊ぶ。友達と話し合いをしながら、秋の自然物を使って一緒に遊ぶ。【主】・【対】                 |
| 第13時   | 自分の遊ぶものをつくり、さらに必要な秋のものを考える。友達と話し合いをしながら、秋の自然物を使って一緒に遊ぶ。【主】・【対】             |
| 第14～18時  | 公園に出かけ、自然と触れ合い、遊びに必要な秋のものを集めたり、遊んだりする。友達と話し合いをしながら、秋の自然物を使って一緒に遊ぶ。【主】・【対】  |

|              |   |
|--------------|---|
| 3 秋の遊び名人になろう |   |
| 第19～21時      | 遊ぶものをつくる。友達と話し合いをしながら、秋の自然物を使って遊ぶものをつくる。【主】・【対】                                   |
| 第22～23時      | つくったものを紹介し合い、楽しく遊ぶ。友達と意見交流することで新たな気付きを共有する。（秋の遊び名人パートⅠ）【主】・【対】・【深】                |
| 第24時         | 秋の遊びを振り返り、他のクラスとの交流会について話し合う。友達と意見交流することで新たな気付きを共有する。【主】・【対】                      |
| 第25～26時      | 他のクラスの友達に、つくったものを紹介し合い楽しく遊ぶ。他のクラスの友達と意見交流することで新たな気付きを共有する。（秋の遊び名人パートⅡ）【主】・【対】・【深】 |
| 第27時         | 季節の変化や、落ち葉や木の実で遊んだことをカードや絵や文で表して学習をまとめる。友達と意見交流することで新たな気付きを共有する。【主】・【対】・【深】       |

\*「主体的な学び」：【主】 「対話的な学び」：【対】  
「深い学び」：【深】

第1部の第1時から第3時では、校庭で秋を探しながら、自然と触れ合う。友達と話し合いをしながら秋を探す活動を設定し、主体的・対話的な学びを意識して指導する。第4時では、秋になって自然の様子など変わってきている点について話し合う。友達と意見交流することで新たな気付きを共有する活動を設定し、対話的な学びを意識して指導する。第5時から9時では、公園に出かけ、秋を探しながら、自然と触れ合い、秋の自然物を使って遊ぶ。友達と話し合いをしながら秋を探し、秋の自然物を使って友達と遊ぶ活動を設定し、主体的・対話的な学びを意識して指導する。第10時では、公園や校庭で、見付けたものや遊びを紹介する。友達と意見交流することで新たな気付きを共有する活動を設定し、主体的・対話的な学びを意識して指導する。

第2部の第11時から第12時では、見付けた秋の自然物を使って、つくりながら遊ぶ。友達と話し合いをしながら、秋の自然物を使って一緒に遊ぶ活動を設定し、主体的・対話的な学びを意識して指導する。第13時では、自分の遊ぶものをつくり、さらに必要な秋のものを考える。友達と話し合いをしながら、秋の自然物を使って一緒に遊ぶ活動を設定し、主体的・対話的な学びを意識して指導する。第14時から第18時では、公園に出かけ、自然と触れ合い、遊びに必要な秋のものを集めたり、遊んだりする。友達と話し合いをしながら、秋の自然物を使って一緒に遊ぶ活動を設定し、主体的・対話的な学びを意識して指導する。

第3部の第19時から第21時では、遊ぶものをつくる。



友達と話し合いをしながら、秋の自然物を使って遊ぶものをつくる活動を設定し、主体的・対話的な学びを意識して指導する。第22時から第23時では、つくったものを紹介し合い、楽しく遊ぶ。友達と意見を交流することで新たな気づきを共有する（秋の遊び名人パートⅠ）活動を設定し、主体的・対話的で深い学びを意識して指導する。第24時では、秋の遊びを振り返り、他のクラスとの交流会について話し合う。友達と意見を交流することで新たな気づきを共有する活動を設定し、主体的・対話的な学びを意識して指導する。第25時から第26時では、他のクラスの友達に、つくったものを紹介し合い楽しく遊ぶ。他のクラスの友達と意見を交流することで新たな気づきを共有する（秋の遊び名人パートⅡ）活動を設定し、主体的・対話的で深い学びを意識して指導する。第27時では、季節の変化や、落ち葉や木の実で遊んだことをカードや絵や文で表して学習をまとめる。友達と意見を交流することで新たな気づきを共有する活動を設定し、主体的・対話的で深い学びを意識して指導する。

この改善した授業を、改訂された目標と見比べた場合、「(1) 秋を探して自然物を活用して遊ぶ活動や体験の過程において、自分自身、身近な友達、秋や自然物の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、秋の自然物を用いて友達と遊ぶことに必要な技能を身に付けるようにする」,「(2) 身近な友達、秋の自然物で遊ぶことを自分との関わりで捉え、自分自身や友達と秋の自然物で遊ぶことについて考え、多様な方法で表現することができるようにする。」,「(3) 身近な友達に自ら働きかけ、積極的に秋の自然物を用いて遊ぶなどし、意欲や自信をもって学んだり季節の自然物を用いて友達との関わりを豊かにしたりしようとする態度を養う。」と表現することができる。

## 6. おわりに

本稿では、中央教育審議会が、平成28年12月21日に示した「答申」に関して、学習指導要領等の改善の方向性として出された6点により枠組みを再構築すること、資質・能力の三つの柱に基づく教育課程の枠組みの整理がなされていること、「主体的・対話的で深い学び」に関して概観してきた。また、「答申」に基づいて改訂された小学校学習指導要領生活に関して、大幅に変更された目標の特色について考察し、生活科固有の「主体的・対話的で深い学び」に関してみてきた。そして、生活科の授業実践に係る課題について考察し、今後望まれる授業に関してより改善された指導計画を、生活科固有の「主体的・対話的で深い学び」に着目し、提示した。

今後、改訂された生活科の目標に対応して授業実践がなされるわけだが、今まで行われてきた多様な授業実践・研究踏まえながら、生活科固有の「主体的・対話的で深い学び」に対応するような授業を開発することが求められている。

## 引用文献

- 1) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」p. 20, 2016年
- 2) 前掲書1) pp. 20-21
- 3) 前掲書1) p. 21
- 4) 前掲書1) p. 28
- 5) 前掲書1) pp. 49-50
- 6) 前掲書1) p. 50
- 7) 前掲書1) p. 50
- 8) 前掲書1) p. 50
- 9) 前掲書1) p. 155
- 10) 文部科学省『学習指導要領解説生活編』p. 8, 平成29年 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1387014.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1387014.htm) 閲覧日：平成29年10月27日
- 11) 前掲書1) p. 158
- 12) 前掲書1) pp. 158-159
- 13) 前掲書1) p. 159
- 14) 前掲書1) p. 159
- 15) 田村学編著・みらいの会著『生活・総合 アクティブ・ラーニング』東洋館出版, pp. 29-36, 2015年
- 16) 前掲書15) pp. 45-52
- 17) 前掲書15) p. 30
- 18) 前掲書15) p. 30
- 19) 前掲書15) p. 30
- 20) 前掲書15) p. 46
- 21) 前掲書15) p. 46
- 22) 前掲書15) p. 46

## 参考文献

- 溝上泰『生活科教育 ―21世紀のための教育創造―』学術図書出版, 1994年
- 溝上泰・小原友行共編著『生活科教育 改訂新版 ―21世紀のための教育創造―』学術図書出版, 2000年
- 小原友行・朝倉淳共編著『生活科教育 改訂新版 ―21世紀のための教育創造―』学術図書出版, 2013年
- 田村学編著・みらいの会著『生活・総合 アクティブ・ラーニング』東洋館出版, 2015年
- 文部科学省『小学校学習指導要領生活編』日本文教出版, 平成20年
- 文部科学省『学習指導要領解説生活編』平成29年 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1387014.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1387014.htm) 閲覧日：平成29年10月27日